明石の史跡（７１）四つの供養塔

『新明石の史跡』（平成９年７月刊）をひもとけば、近世という時代に、供養塔を一つではなく、四箇所も造立された人物（明石藩第７代藩主松平信之）が存在するのを知る。その所在地は、下記の通りである（以下、とくに出典を明記しない場合は、前掲書による）。

①漆山（神戸市西区伊川谷町有瀬）
②若宮神社（明石市林２丁目）
③住吉神社（明石市大久保町森田）
④神明神社（明石市魚住町清水）

供養というのは、｛三宝（仏・法・僧）または死者の霊に供物を捧げること。追善供養・施餓鬼供養・開眼供養などさまざまな種類がある｝との由（広辞苑）。この場合は、藩主松平信之の生前の業績にたいするものと理解すべきで、その対象となったものは、何であるのか。

①は、寛文１１年（１６７１）に開削された伊川谷掘割（約５・６キロ）の完成である。これによって当地域も恩恵に浴した。
②は、船上村に池田輝政以来、課税されていた水主米（かこまい＝領主の軍事的必要に応じて徴発された雑税）の免除。
③は、寛文６年（１６６６）頃に完成したといわれる、新田開発。
④は、新田開発によって成立した新村に、期間限定の加役免除を認める。

被支配層にとって、「お上」に望むことは、安定した日々の生活の維持のために、ささやかな所得の増加（新田開発）と、免税（減税）である。四箇所の特定地域を対象にしたものとはいえ、住民が、前藩主松平信之の訃報を耳にし、その業績にたいする報謝を、供養塔という形にしたのである。供養塔の造立を耳にした、当時の藩主の感想を聞いてみたいものである。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

森田住吉神社供養塔